

吉備池廃寺の発掘調査(第3次) 現地説明会資料

— 南面・西面回廊および中門推定地 —

1999. 3. 13

桜井市教育委員会

奈良国立文化財研究所

1 はじめに

吉備池廃寺は桜井市吉備にある溜め池「吉備池」の東南部の護岸工事にともない、1997年1月から実施した調査によって発見された飛鳥時代の寺院跡である。

池の南岸に取り込まれた2つの土壇のうち、東の土壇は1997年の調査によって、東西37m、南北約28mの掘込地業の上に、版築土を積んだ巨大な基壇であって、南面する金堂跡と判明した。そして、出土した軒瓦の年代観と基壇規模および想定される伽藍規模の巨大さなどから、この寺院跡は西暦639年に舒明天皇が発願した「百濟大寺」の可能性が高いと考えられた。

昨年1月からの調査では、西の土壇は旧地表面から版築土を積み上げて造られ、その中央部に巨大な抜取穴があることなどから、一辺30m近い塔跡と判明した。基壇規模の大きさからもこの塔が「九重塔」である可能性が高く、寺院跡が「百濟大寺」である可能性はますます高まった。また、塔跡の南約56mのところ幅約6mの回廊があることを確認した。その結果、吉備池廃寺の伽藍は、東に金堂、西に塔があり、回廊がそれらを取り囲む「法隆寺式伽藍配置」であって、水田畦畔が南に張り出して見える両基壇間の中央部に中門が開くものと想定された。

また、昨年10月～12月には、桜井市が吉備池の東北部で宅地造成に先立って調査を行って、大規模な東西棟掘立柱建物を見つけ、僧房の一部と推定しました。

今年度の調査は(1)南面の中央に想定される中門跡を確認することを目的として、その西半分が収まるであろう水田(小字カムリ石)と、(2)西面回廊あるいは寺地の西限についての資料を得ることを目的として、塔の西の水田3枚(小字辻カマチ)に調査区を設けることにした。回廊西南隅想定位置にも小規模な調査区を設定した結果、調査面積は合計約720㎡となった。調査は1999年1月7日から開始し、継続中である。

2 わかったこと

<塔-金堂中軸線上に中門はない>

吉備池廃寺に関する遺構は南面回廊、西面回廊、溝地業があり、塀8、土坑9もその可能性がある。

南面回廊の遺構は石組南(外)雨落溝、北(内)雨落溝の抜取溝、その南に接した黄色粘土の帯、回廊北側柱礎石抜取穴がある。石組溝は25～50cm大の自然石を一石並べて造られ、幅45cm 深さ30cm。底面、上端ともに検出した17m分で約20cm、西方が低い。堆積土はほと

んどなく南側石の上まで丁寧に埋め立てている。抜取溝は上では幅1.5mある。この南の黄色粘土の帯は基壇縁石の掘形か抜取りであろう。南の石組溝の内側にも同様の基壇縁石を想定した場合、回廊基壇の幅は約5.6mと推定される。回廊基壇上は、南側柱列が後の東西大溝1で壊されている上に、基壇土が削平されており、北側柱列の礎石抜取穴6個を痕跡的に確認したにとどまる。桁行柱間は約3m。南面回廊のこうした状況は、昨年の調査での所見と全く同じで、それが塔の真南から塔-金堂の中軸線を越えて一直線に検出されたから、その間に中門が存在しないことはほぼ確実である。

<塔の真西にも同じ規模の回廊が通る>

西面回廊に関する遺構は、西2区で東(内)雨落溝の抜取溝と東側柱礎石抜取穴1個を検出した。遺存状況が悪く、ともに極めて痕跡的であるが、東雨落溝の抜取溝の状況は同じく回廊内側をめぐる南面回廊北雨落溝の状況と酷似していて、一連の遺構と判断できる。その場合、西(外)雨落溝は、西2区と西3区との間の水田畦畔直下に存在すると考えられ、塔心礎の西約43mに位置する。

なお、回廊西南隅に設けた小規模な調査区では、南面回廊の南(外)雨落溝抜取痕跡を確認したものの、石組溝は検出されなかった。

西面回廊東雨落溝の東約2mにある塀8は、柱間1.6mの1間分確認した。北と南には同じ柱間では延びない。この塀は中軸線とかかわる可能性がある。

<寺地西限の手がかりは？>

西面回廊西半から西南西に延びる「溝地業」は幅約1.5m、深さ0.5mの断面V字形の溝の底に人頭大の石を詰めて、黄色山土で厚く埋めたもので、金堂基壇で確認した掘込地業の構造に似ている。長さ15m分を確認した。この「溝地業」の周囲には黄色粘土の塊が混じった灰色粘土層があり、より西方までのびる。長さ22m分を検出。「溝地業」の底の石は西南西に低くなり、その構造と傾斜から伽藍地内の排水を意図した基礎地業の一部と考えられる。少なくともその西端までは寺地に含まれるであろう。西4区では寺地の西限を示す遺構は検出されなかった。西3区の西端で検出した斜溝11は「溝地業」の西延長上にある同方向の溝である。両者が一連の遺構である場合は、その延びゆく先に寺地の西限の手がかりがあることになる。この点は補足調査及び来年度以降の調査を待ちたい。

「溝地業」の北にある土坑9は直径約1.8mの円形で、中に薄い板材が2カ所立つ。藤原京の時期の東西溝10よりも古いことから寺に関わる可能性がある。

<移転後は伽藍地内まで藤原京の街区になった>

寺廃絶以後の遺構には南調査区の東西大溝1、土坑3～7、掘立柱建物2、西調査区の東西溝10、東西溝13、塀12などがある。土坑7や東西溝10・13で見つかった土器から、これら



は藤原京の時代の遺構と考えられる。

東西大溝1は回廊南雨落溝の北側石に接して掘られた幅2.2m、深さ50cm以上の素掘溝。下層は堆積層で、吉備池廃寺の瓦片のほか、木片、獣骨片が含まれる。上層は埋立土。藤原京三条大路推定線の近くにあり、その北側溝の可能性がある。

掘立柱建物2は東西大溝1に近接して、一辺約1mの掘形を持つ柱穴3個を検出した。柱間2.1m。梁間2間の東西棟建物の西妻柱列と考えられる。

土坑5～7は大きさや形に類似性があり、深さや埋土も同じで、配置にも規則性があることから同時期の遺構とみられる。土坑7から藤原京の時代の土器が出土した。土坑3は比較的多くの瓦片が含まれる点で土坑6とは異なる。一回り大きな土坑4を含めて、伽藍地内に藤原京の時代の遺構が営まれていることが確認できた。

東西溝13は幅約2m、深さ20cm。底が平坦な素掘溝である。西3区西端に始まり西4区南端を真西にのび、長さ25m分検出した。溝の東端には細い杭が打ち込まれている。底には木簡、加工木片、板材が堆積し、上層から藤原京の時代に須恵器杯などが出土した。木簡には数文字書かれているが判読できない。溝は推定三条大路の北約48mにあり、その東端は推定九坊大路からやはり48mである。坪内を等分するものではないが両者がほぼ等しいことは興味深い。溝の北岸近くには東西塀12が併行する。柱間2.1mで4間分検出した。西3区北端の東西溝10は、底が丸くて浅い素掘溝で、幅0.8m。真東西に長さ13m分検出した。藤原京の時代の土師器などが出土した。

3 まとめと課題

a) 塔一金堂の中軸線上の南面回廊に中門がないことと、塔の真西で西面回廊を確認したことから西面と塔一金堂中軸線までの南面は回廊で閉じられていることが判明した。

では中門はどこにあるのか？。東西に長い掘込地業をもつ金堂が南面するのはほぼ確かであり、中門は南面回廊上の塔一金堂中軸線以東に想定しなければならない。残された候補地の第一は金堂正面であろうが、いずれにしてもこれまで知られていない配置である。

b) 伽藍内の東に金堂、西に塔を並置する点では「法隆寺式」に類似するものの、中門の位置まで含めた場合、典型的な「法隆寺式伽藍配置」のモデルとはなりえない。

また、検出した南面回廊を塔の中心で北へ折り返した場合、回廊の南北幅は約105mと推定できる。しかし、今回の調査では塔一金堂中軸線が伽藍の東西の中軸であることを示す施設などを確認できなかったから、回廊東西幅については中門、東面回廊などの検出をめざした調査結果を待って検討したい。

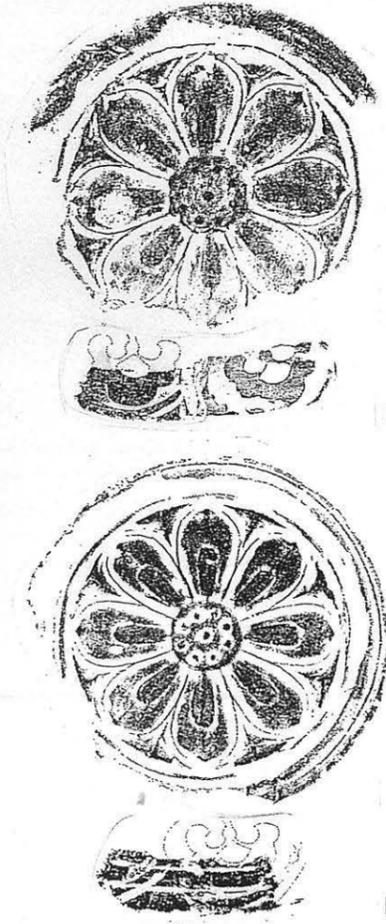
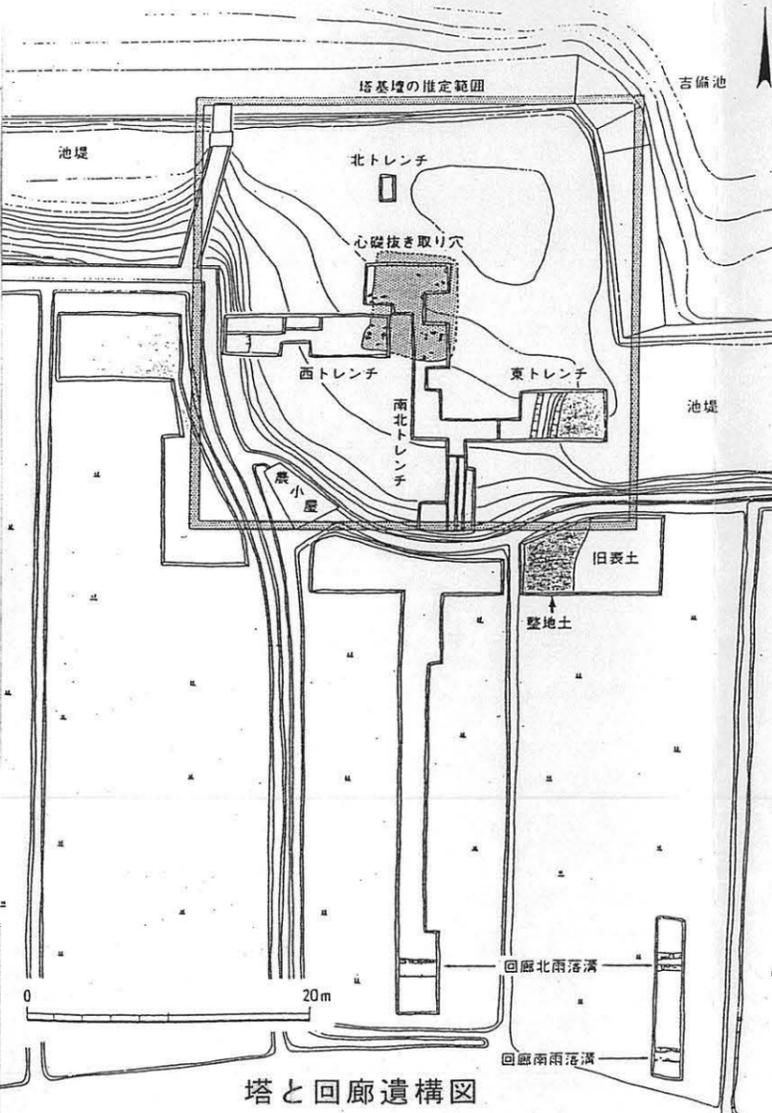
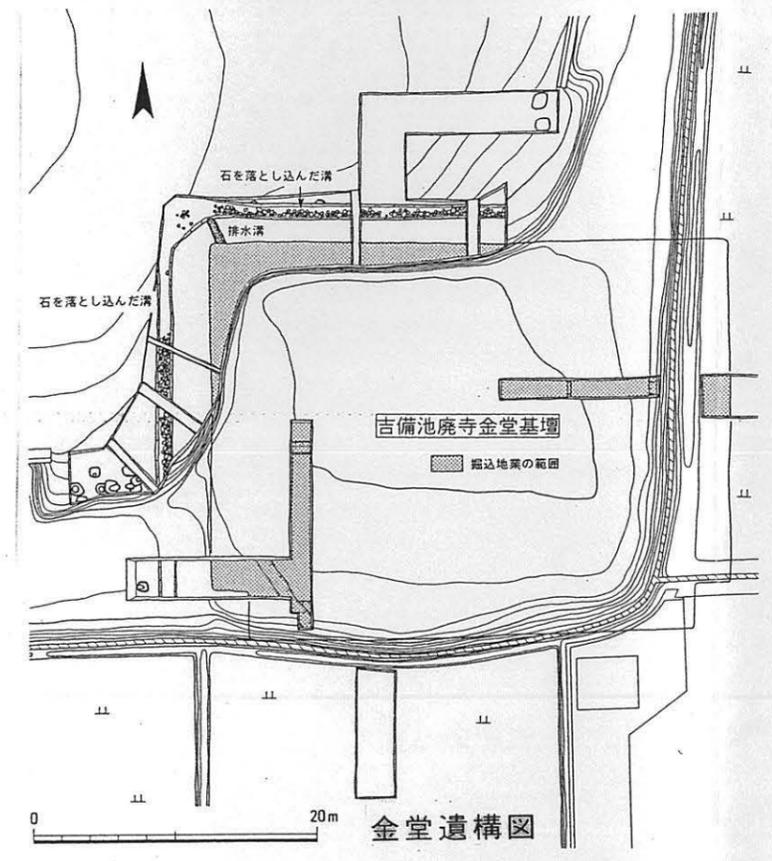
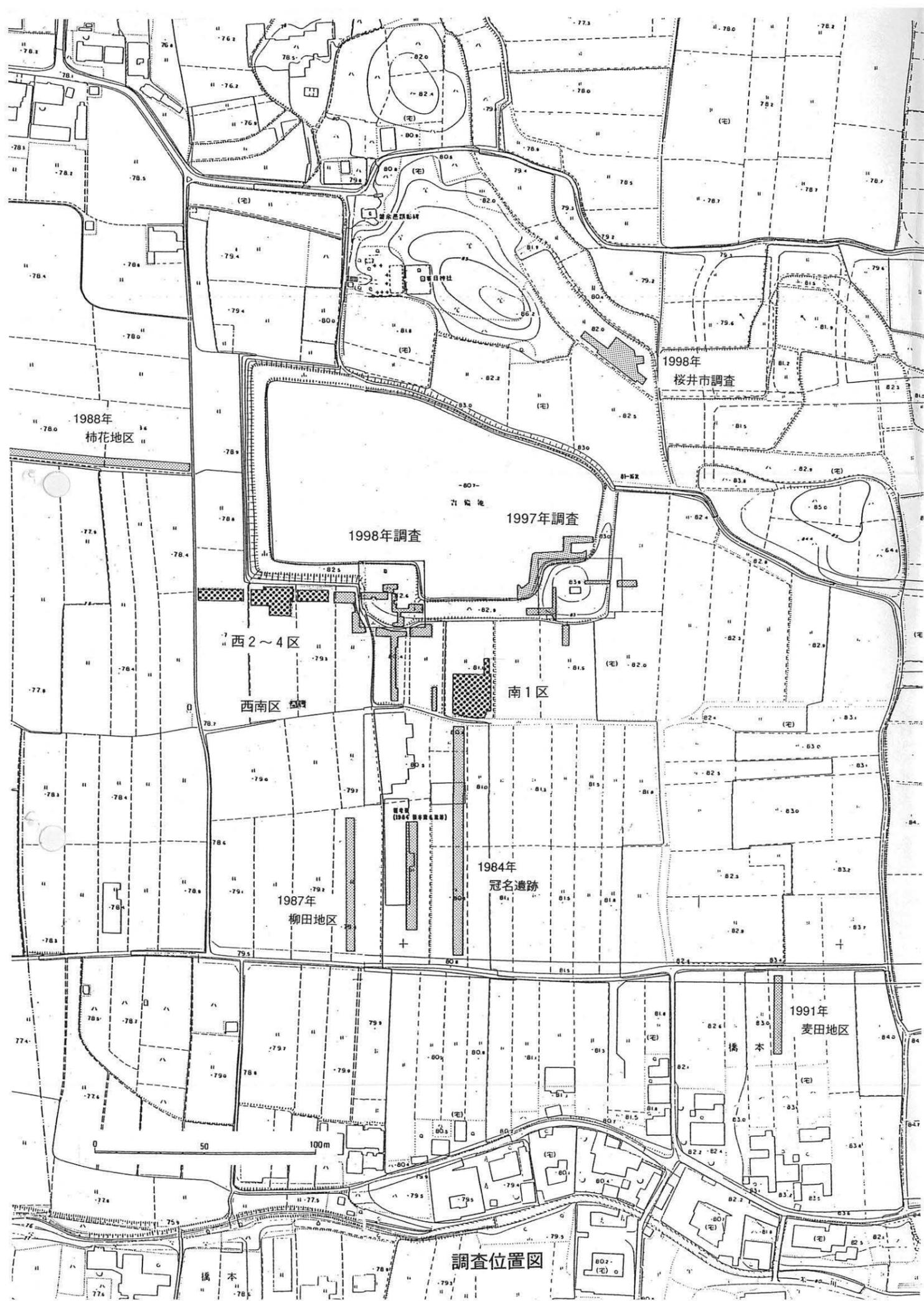
c) 建物造営の手順では基壇外装や雨落溝の施工は、建物の造作でそれらを傷つける恐れがなくなった段階で行われるものである。今回、南面回廊南(外)雨落溝の石組みを広範囲に検出し、基壇縁石の存在も想定できる。であれば、回廊は未完成ではあり得ない。吉備池東北部では僧房と推定される建物が発見されており、伽藍全体の完成度はかなり高かったと考え

るべきである。今後、中門、講堂、寺地の外郭と門などの発見につとめたい。

d) 回廊内外に多くの藤原京の時代の遺構を確認した。周辺地におけるこれまでの調査でも、南の冠名遺跡、その西の柳田地区、池東部の1998年の調査などで、坪内区画溝、掘立柱建物、藤原宮式軒瓦などが検出されており、金堂西南でみつかった掘立柱建物もそれに含めて良いであろう。藤原京の造営は天武朝には始まっていると考えられ、基壇が百濟大寺の堂塔であった記憶はなお鮮明なはずである。そうした時点で堂塔跡地の近辺にまでも建物が営まれる状況を想定すると、吉備池廃寺は藤原京の条坊施工や街区利用の実態をさぐる上でも貴重な遺跡であるといえる。今後の調査はこうした視点も必要となろう。

百濟大寺・高市大寺・大官大寺・大安寺の沿革

639	舒明11年2月 7月	百濟川の側に子部社を切り開き九重塔を建て百濟大寺と号す。社神の怨みにより、九重塔と金堂の石鳥尾を焼く(縁起) 今年大宮及び大寺を造作らしむとのたまう。 乃ち百濟川の側を以て宮処とす。是を以て西の民は宮を造り、東の民は寺を造る。書直県をその大匠とする(日本書紀)
640	舒明12年10月	舒明、百濟宮に遷る(日本書紀)
641	舒明13年10月	舒明、百濟宮に死去。宮の北で殯す(日本書紀)
642	皇極元年9月	百濟大寺造営のために近江と越の民を動員する(日本書紀) 阿倍倉橋麻呂・穂積百足を造此寺司に任じる(縁起)
645	大化元年8月	恵妙を寺主とする
651	白雉2年3月	刺繡仏完成 刺繡仏四十六像を施入(日本書紀)
668	天智7年	釈迦丈六仏ほかの乾漆像を百濟大寺に安置(扶桑略記)
673	天武2年2月 12月	天武、飛鳥浄御原宮で即位する(日本書紀) 百濟の地から高市の地へ移転する(縁起) 御野王・紀臣訶多麻呂を造高市大寺司に任ず(書紀・縁起)
677	天武6年9月 この頃	高市大寺を大官大寺と改称する(縁起) 藤原京の造営始まる
682	天武11年8月	大官大寺で百四十人余りを出家させる(日本書紀)
685	天武14年9月	大官大寺・川原寺・飛鳥寺で経を読ませる(日本書紀)
686	朱鳥元年5月 7月 12月	大官大寺に食封七百戸・税三十万束を施入(日本書紀) 諸王臣が観世音像を造り、観世音経を大官大寺で講説(日本書紀) 大官・飛鳥・川原・小墾田豊浦・坂田に無遮大会を設ける(書紀)
693	持統7年10月	仁王会を諸寺で行い、刺繡大灌頂幡を施入(日本書紀)
694	持統8年 持統8年12月 持統朝	金光明経・金剛般若経施入(縁起) 持統、藤原宮へ遷る(日本書紀) 寺主恵勢法師に命じて鐘を鑄造させる(縁起)
701	大宝元年7月	造大安寺官と造薬師寺官を寮に準じさせる 造塔官と造丈六官を司に準じさせる(続日本紀)
702	大宝2年8月	高橋朝臣笠間を造大安寺司に任命する(続日本紀)
710	文武朝	九重塔と金堂を建て丈六仏を造る(縁起) = 現・史跡大官大寺跡
711	和銅3年3月 和銅4年	元明、平城京へ遷都 藤原宮・大官大寺焼ける(扶桑略記)
716	霊龜2年5月	元興寺(=大安寺)を平城京の左京六条四坊に移す(続日本紀)
880	元慶4年10月	百濟大寺と高市大官寺の旧寺地である 十市郡百濟川辺の田一町七段百六十歩と高市郡夜部村の田十町七段二百五十歩を大安寺の願いにより返還する(日本三代実録) 百濟大寺は「十市郡百濟川辺」「子部大神在寺近則」



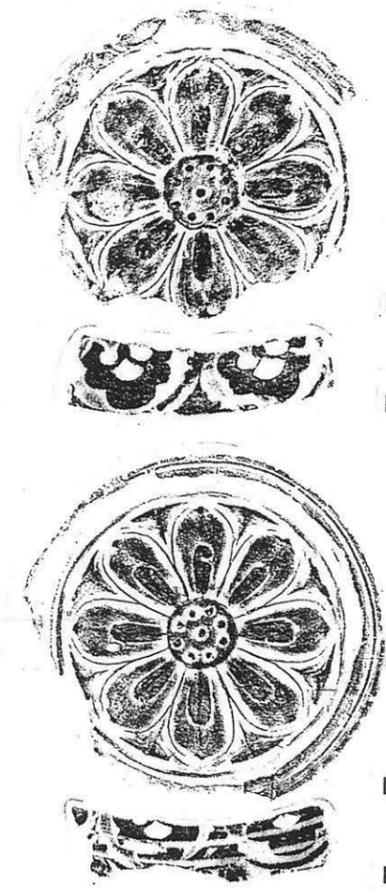
IB (採集品)

lb1

IA

lb2

吉備池廃寺の軒瓦 (1:4)



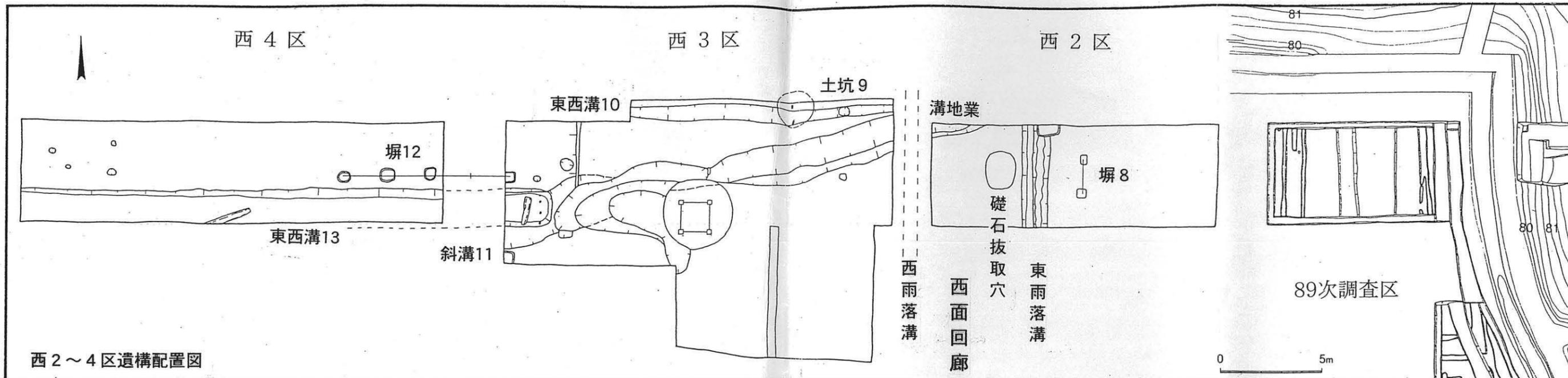
IB

lb1

IA

lb2

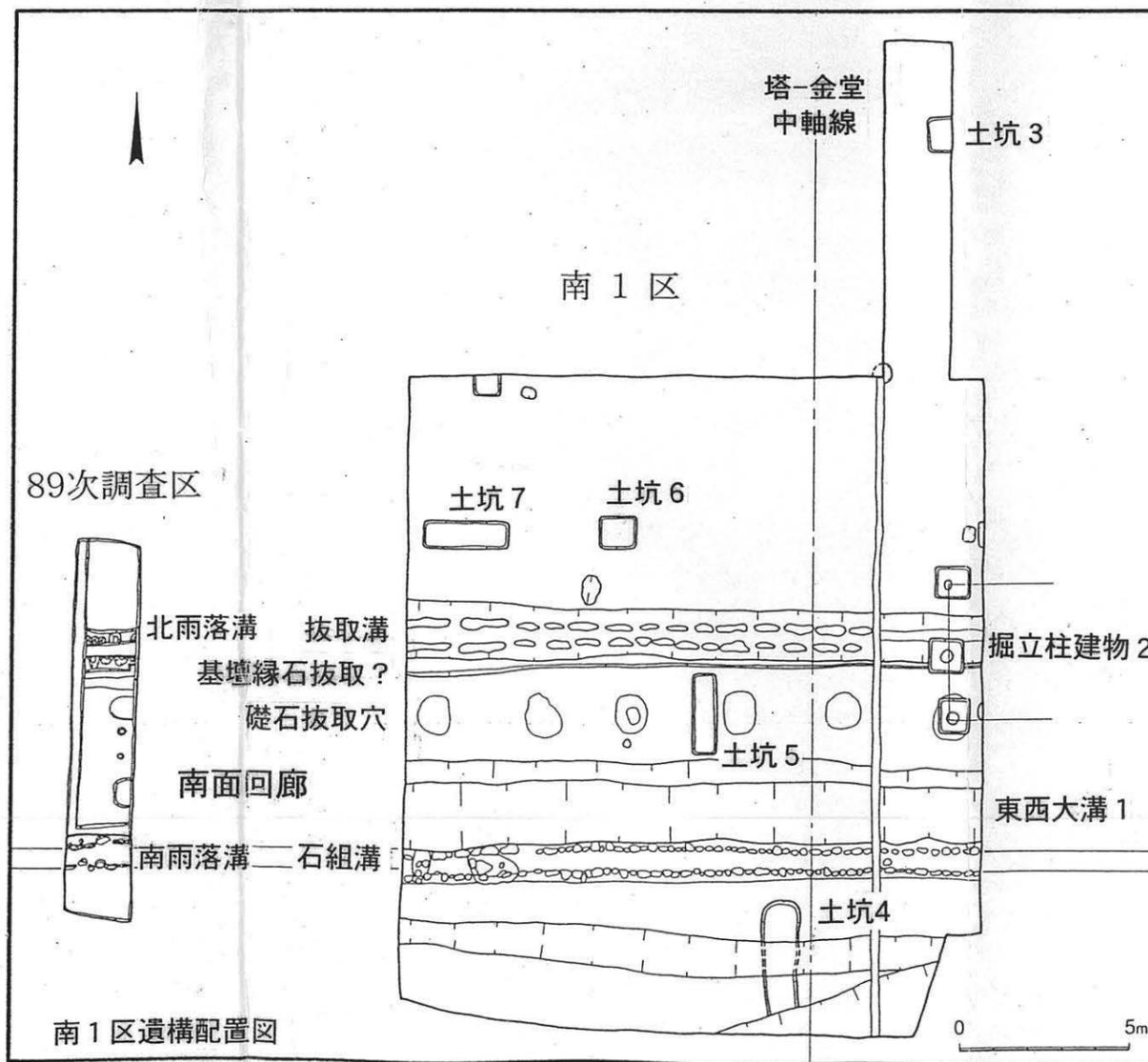
<参考> 木之本廃寺の軒瓦 (1:4)



西2~4区遺構配置図



伽藍復原図 (1:2000)



89次調査区

南1区遺構配置図